

え。ちょっと。マジありえない。

いないじゃん！ カタガキくん、来てないじゃん！

わざわざ土曜に研究室に来たってのに。絶対ここにいると思ってたのに。

ていうか、何なの、この部屋。なんでサーバラックにイルミネーションついてんの？

なんで光学実験台にオーナメントが配置されてんの!? 今日って臨時のゼミじゃなかったの？

「ほくら、みんな。ローストチキン焼けたよ」

「……千古^{せんこ}先生、お願いですから乾熱滅菌器で料理しないでください（ゴゴゴゴゴゴ）」
チキンの香ばしい匂いと共に、真っ赤なサンタ服に身を包んだ千古先生が奥の実験室から登場した。似合いすぎてる。悪夢かな。その後ろで、徐^{シュ}さんがいつもみたくマジギレカウントダウン中。同期の四回生や先輩達はすでに出来上がっちゃってる。てかなんで転がってる瓶がシャンメリーなの。

だいたいさあ、うちの研究室の人達、今日が何の日かわかってるわけ？

12月24日だよ。24日。しかも、土曜の午後。

そんな日にゼミとかありえないって思ったけど、研究室でクリパはもつとありえない。

どんだけみんなぼっちなわけ!?

——そう、今日はさすがに研究室に来てるかなって思ったんだよね。

だってさ、やっぱ。今日くらいは、さ。

会って、話とかしたいじゃん。

なのに、来てない。壁の名札は裏返ったままだ。

「……てかさー、今日ってゼミじゃなかったっけ」

紙皿に割り箸で、元はケーキだったらしい何かをつついてる同期の一人に、聞いてみる。

「いやー、俺もそう思ってたけど、来たらこれだし」

「ふーん。……てかカタガキくんとか来てくない?」

なんとなく早口になった。

「あー。……まあ、わりといつも来てねーし」

それはそうなんだけどさ。もしかして、まーた倒れてたりしないよね。それとも、誰かと一緒に……いやいやいや、それはない。それは絶対ない。ない……はず。うん。ない

ね！

カタガキくんはいない。ゼミもない。そして今日は12月24日、土曜日だ。なんか、めっちゃバカみたいじゃん。

そうと決まったら、もうここに用はない。結局バッグも置かずコートも脱がずに、千古サントがずだ袋から電子部品をみんなにばら撒いてる隙に、そっと退散した。滞在時間40秒。どうせあと三ヶ月で卒業だし、千古研にそこまでの忠誠心はないかなあ。

* * *

うん。そう。何はともあれ、ヤタにクリスマスプレゼントをあげないとねってことで、それが目的。^{ひやくまんべん}百万遍のドラッグストアで、いつものフードよりちよつとお高いやつに、奮発しておもちやもつけちゃった。前のは、もうヨレヨレだし。どうせカタガキくんのことだから、今日が何の日かも忘れてそうだもんね。だから代わりに、いい子にしてたヤタのサントになってあげるんだ。ヤタの。それが目的。

そんで、まあ、せっかくだし？ 激混みケンタツキーは諦めてセブンでチキン二本と、あと凍屋^{りんや}でケーキ二つと。どうせろくなもの食べてなさそうだし？ さすがにケーキ持参した人間を追い返したりはしないだろうしさ。あ、病み上がりだから栄養のつくものも必要だよ。年末年始の食糧も。んで、勢いでつい、百均でサンタ帽、買っちゃった。千古先生のこと笑えないな。どうせならはっちゃけていきましょー。

ふふ。やば。なんかちよつと楽しくなってきた。ゼミで会うよか全然いいじゃん。むしろめっちゃラツキーじゃん、これって。

だってさ、やっぱ。今日くらいは、さ。

このくらいしたっていいよね。

* * *

もうすっかり日が落ちた西の空を見ると、細い三日月が懸かってた。アパートの前で、いつもの窓をそつと確認して、カーテン越しの灯りにちよつとほつとする。底冷えする廊下で、両手にはずつしり重いビニール袋、頭にはサンタ帽。

コンコン、とノックを二回。

少し待つ。

いち早く気づいたヤタの、にゃあ、という声が聴こえて、思わず頬がにんまりと緩む。ありがと、ヤタ。こんなさやかな幸せを味わわせてくれて。

でも。

うれしいけど、そうじゃないんだ。そのために来たんじゃない。

事情は知らないけど、いつつもバカみたいに必死にペンキョして。この世に幸せなことなんて何もない、みたいな思い詰めた顔して。

それでもさ、やっぱ。今日くらいは、さ。

カタガキくんにも少しでも、ごく普通の幸せを味わってほしいんだ。

……そのくらいしか、できることがないから。

ね、今日くらいはちよつとだけ、幸せになつてみなよ、バーカ。

足音に続いて、がちやりとドアが開く。驚いた顔がそこに立っている。

さ、テンション上げてくよ。

「カタガキくんっ。やっほ。メリークリスマス！」

（了）